

II 主題設定の理由

研究主題

社会を見つめ、未来を問いつける社会科教育の創造
－学習意欲の向上をめざした思考力・判断力・表現力の育成－

1 主題設定の理由

(1) 教育基本法の改定と社会科の果たす役割

平成18年12月、約60年ぶりに教育基本法が改正され、これからの教育のあるべき姿、めざすべき理念が明らかにされた。また、それを受けて平成19年には学校教育法をはじめ教育三法も改正され、教育改革は新たな一步を踏み出した。昭和22年に教育基本法が制定されてから、教育を取り巻く環境が大きく変わったからである。

科学技術の進歩、情報化・国際化、少子高齢化、核家族化、価値観の多様化などに代表される社会の大きな変化、教育力の低下や育児に不安を抱える親の増加などの家庭の問題、家庭と同じく教育力の低下や連帯感の希薄化などの地域社会の問題、学校もいじめや校内暴力などの問題行動や教育の質の向上といった課題を抱えている。

そして何よりも、日々教育実践に取り組んでいるわたしたち教員が感じている子どもたちの大きな変化がある。基本的生活習慣の乱れ、学ぶ意欲の低下や学力の低下傾向、体力の低下、社会性・規範意識の欠如などである。

こうした子どもたちの実態から出発し、家庭・学校・地域社会を含めた変化の激しい社会全体の中で、常に出てくる新しい課題に試行錯誤しながらも柔軟に対応していく力を子どもたちに育成していくことが必要である。同時に、このような社会を主体的に生きていくためには、よりよい社会の実現をめざして現代社会の課題を発見し解決していくことのできる力を備えていることが求められている。すなわち、社会的事象を知る・分かるだけでなく、その背景を熟考し、それに対する自分なりの意見や考えをもち、それを表現しながら社会への参加・参画を考えていく力である。

折しも平成23年3月11日、東日本大震災が起こった。被災地の惨状はここで述べるまでもないが、この地震の発生により、被災地から離れた広島の地でもさまざまな日本社会の課題を目の当たりにした。電力供給における課題が最たる例であろう。私たちはこのまま原子力発電に頼っていくのか、それとも節電を掲げ、脱原発路線を歩み始めるのか、まさによりよい社会を求め、国民一人一人の主体的な意思決定や意思表示が求められる場ではないだろうか。

一方、被災地からは、社会に主体的にかかわろうとしている子どもたちの姿が伝えられている。例えば、自ら「青年協力隊」と名乗り防犯パトロールを行う子どもたち。炊き出しに参加する子どもたち。避難所で新聞を作成・掲示している子どもたち。まさに目の前の課題・惨事に対しても柔軟に対応し、現実の社会に参加している姿ではないだろうか。

教育基本法の第1条「教育の目的」には、以下のように記されている。

「教育は、人格の完成をめざし、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」

これは学習指導要領に示された社会科の目標とも重なる文言が多い。公民的資質の基礎を養い、よりよい生き方を問うことをねらいとする社会科教育の果たす役割が、極めて大きくなってきているといえる。

(2) 社会科授業の実態

児童は、「おもしろい社会科」を期待している。また、「学習していることを分かりたい」という願いをもっている。しかしながら、「社会科がおもしろくない」と感じる児童が多いのが現実である。

身の回りのことを取り上げて学習を進めてきているが、いつの間にか子どもの意識が学習していることと自分の生活とが離れてしまっていることがその要因として考えられる。例えば、「身の回りの製品をつくる工業の様子」を学習しているときは、自分の生活との関連を児童は見出しているが、工業地帯や工業地域の学習を通して日本全体の工業の特色を学習したり、貿易を通して諸外国とのつながりを調べたりするときには、自分の生活との関連を見出せずにいることが挙げられる。そのために、児童は暗記しているだけにとどまり、社会科がおもしろくないと感じているのであると考えられる。

また、社会の変化に気付くことのできる児童はいる。しかしながら、その変化はなぜ起きるのだろうか、その変化の要因を見付けようという関心を高めることができずにいる。

「自分で問題を解決してみたい」、「社会の仕組みを調べてみたい」という意欲に欠ける傾向にあるととらえている。

児童が、社会科の学習をこのようにとらえる背景としては、我々教師も教科書や副読本だけを使って、その内容を習得させることのみをねらいとした授業や社会見学などの体験的な活動はあるものの学習過程や指導の視点が曖昧で、結果として、何を学習したのか分からないような授業、学習問題やその予想がはっきりしないため、調べ学習はするものの、何のために調べているのか分からないような授業を数多く行っていることが考えられる。

(3) 広島社会科のあゆみとこれからの方向性

広島社会科は、創設以来、子どもたち一人一人が変化の激しい社会の中で、豊かな心を持ち、主体的に生きることが出来る資質や能力、態度を身につけて育ててほしいという願いのもとに「学ぶよろこびがある社会科」、「考える社会科」、「地域の事象や人間の生き方から学ぶ社会科」を一貫して追究し、「広島社会科」として実践研究を重ね、その成果を絶えず全国に発信し続けてきた。

平成4年度の全国大会では、「人間の生き方にせまり、自ら学ぶ力を高める社会科学習ー具体的な活動や体験を通してー」という研究主題を掲げ、具体的な活動を通して、思考、判断、表現できる能力の育成を図るという新しい学力観に立つ社会科教育の在り方を提案した。

また、3度目の開催となった平成17年度の全国大会では、「豊かに感じ、深く考え、と

もに高まり合う社会科学習—よりよい社会をつくるために、考え、判断する子どもをめざして—」を大会主題として、問題解決のための思考力・判断力を育むために、出会いと発見、感動のある学習材を開発し、子どもたち自らが問いを見付け、調べて考え、表現し、仲間とともに考えを深めていく社会科学習を全国に発信し、多くの賛同の声をいただくことができた。

その反面、「ともに高まり合う社会科学習」を受け、授業実践の場面では、関わりや考え合いという要素に重点を置いてしまったため、「話し合い活動が公開の目玉となっていて、確かにそれはうまくいったが、果たしてそれは社会科固有の学びなのだろうか。」という質問も投げかけられた。どの教科においても必要な学びは社会科においても必要であり、この授業の基本の上に成立する議論ではある。その上で「社会科らしい学びとは何か」という根本的な問いが、次なる課題として生まれた。

そして、平成17年度の全国大会から現在に至るまで、社会はますます複雑化し、混迷している。教育の分野においてもPISA型学力が広く注目されるようになったり、学習指導要領が改訂されたりしている。変化の激しい社会に対応していく子どもたちを育てるためには、今一度、不易である基本に立ち返り、社会認識の形成を通して、公民的資質の育成を図る教科である社会科の本質に迫る研究に取り組むべきであると考えた。社会科を専門教科とする教師にとっても、「教科書を読み取るのが社会科だ」としている教師にとっても、「これぞ社会科」と納得のいく授業を創造していきたい。

今回の研究主題の設定は、これまで広島教師たちが築き上げてきた「広島の社会科」を継承しつつ、社会認識の形成と公民的資質の育成とはどういうことで、それはどうすれば実現できるのかを探る実践研究を進めるために提起するものである。

これまでの「広島の社会科」のあゆみ、現在の社会情勢、これからの社会を生きていく上で求められるもの、子どもたちの実態、旧研究主題のもとでの社会科実践上の課題等を総合的に鑑みながら研究主題を設定した。

2 研究主題について

(1) 「社会を見つめ」とは

これからの時代を生き抜くためには、「自らの意思で社会をつくっていかこうとする意欲」や「その社会を維持し、発展させていく資質や能力」が求められる。

これらの力を育むために、まず、自分の住んでいる地域などの身近な社会的事象を見つめ、より確かな事実として認識した上で、社会的事象の意味や関係性、価値をとらえることが必要である。

研究主題の「社会を見つめる」とは、「社会を知る」、「社会がわかる」ことを指す。子どもが社会的事象と出会い、「どのように、どのような」と問い、事象の過程や特色・構造を表現するとともに、社会的事象に対して「なぜ、どうして」と迫ることにより、目的と手段、条件と結果、原因と結果の関係を表現することである。

混沌とする時代の中で、冷静に現代社会を見つめ、何が起きているのか、何が問題なのか、何が原因なのか、を分析する力は不可欠である。

「広島の社会科」では、問題解決的な学習における「単元を貫く学習問題」を設定することを大切にしてきた。そしてそれは、児童に確かな社会認識を形成するという社会科固有の目標にたちかえればこれまで以上に重要視していく必要がある。

(2) 「未来を問い続ける」とは

「未来を問い続ける」とは、「社会に生きる」ことを指す。自分なりの意見や考えをもち、「何をすべきか、どのような解決策が望ましいか」を考え、表現しながら社会への参加・参画を模索していくことである。

現代社会に内在する問題をどのように解決していくのか、問題解決には何が必要なのか考えをめぐらし、これから先を見据える確かな目は必要不可欠である。

問題を正しく把握することができれば、新しい社会や未来をめざし、変革して、社会を明るくものにしていくための道筋や手段が見えてくる。そのために必要な資質や能力の基盤は多くあるが、とりわけ人の思いに共感し共有することができる心情や、様々な事象を多面的・多角的に考えたり、公正に判断したりすることができる力が必要である。そのような力を社会科の学習の中で育み、培っていくことをめざしたい。

さらに大事なことは、よりよい社会や未来の実現のために学び続け、調べ続け、考え続ける姿である。単元の学習中はもちろんであるが、学習が終わってからも学び続ける子どもたちの姿をこれまで以上にめざしていきたい。これは著しい社会の変化に主体的に対応でき、新学習指導要領でも理念が継続されたように生涯学習の基礎となる「生きる力」の育成とも深い関わりがあると考えられる。そして、究極的には問い続ける、学び続ける中で持続可能な社会、平和な未来の実現をめざすことに通じるものであり、社会に参画する態度も養われるものと信じている。

(3) 「社会科教育の創造」とは

このような実践を進めるために、「自ら考え、自ら行動する」学習活動や「調べ、考える」学習過程、子どもたち一人一人のよさや可能性を生かし、ほめて育てるなどの学習支援活動と評価の工夫が必要となる。これはこれまでの「広島社会科」で大切にされてきたことである。だからこそ、「広島社会科」実践にこだわり、継承し、広島の子どもの育てていくことが重要である。教師も社会科学習を通して児童のあるべき姿をめざし、十分に指導力を発揮していく必要がある。

つまり、「社会科教育の創造」とは、学習内容・課題の設定の仕方、学習活動の連続性、指導と評価の一体化など教師の役割をも含めた、社会科の指導のあり方全体を再構築していこうとするものである。

(4) サブテーマ「学習意欲の向上をめざした思考力・判断力・表現力の育成」について

サブテーマの「学習意欲の向上をめざした思考力・判断力・表現力の育成」は、主題を具現化する手立てを表している。学習意欲なくして、「社会を見つめ、未来を問い続ける」子どもを育てていくことはできないと考えたからである。

学習は学ぼうとする意欲に支えられ、社会科の学習も社会的事象やそれに関わる人々への関心から出発する。しかし現状は、社会や他者への無関心が広がり、それは今後ますます加速する可能性がある。これからの社会科を考え、「社会を見つめ、未来を問い続ける社会科」を実現する際、学習意欲は今まで以上に重要になってくる。

私たちが大切にしたい学習意欲とは二つあり、一つ目は授業で必要となる学習意欲である。例えば、子どもたちは教材とであい、調べる意欲が湧いたり、引き出されたりする。さらに学ぼうとする姿勢を持続させるためには、調べたことをもとにして、分かるという経験が必要となる。分かるためには、思考力や判断力が必要不可欠となる。また、自分の考えたことをより分かりやすく説明しようとするれば、言語活動を伴う表現力も必要となる。このように 思考・判断・表現したことに支えられ、学習意欲は向上していく。言い換えれば、学習意欲を高めるためには思考力・判断力・表現力を育成しなければならないと言える。

二つ目の学習意欲とは、授業後にも生きて働く学習意欲である。生涯にわたって「未来を問い続ける」子どもをめざすためには、その後にも続く学習意欲の種を授業の中にまいておかねばならない。その種は、自ら問題に気付くことの大切さを実感する場面であったり、その場限りに終わらない知識や見方・考え方を獲得し、その価値に気付いたりすることなどが考えられる。

つまり、サブテーマが表していることは、「学ぼうとする力」や、「学んだ力」を生かした「学び続ける力」を育成する授業をめざそうというものである。

3 研究主題に向けて育てたい力

「社会を見つめ、未来を問い続ける」子どもを育てていくためには、図 1 のような社会科授業の構造図を意識した授業づくりを考えていきたい。

社会認識を育てる場とは、過去、そして現在の社会認識を育てていくための授業の場である。実践的な力を育てる場とは、未来を問うていくため、または、新たな問題や他の学習への発展の場、単元を貫く学習問題に対して総合的に判断する授業の場である。単元の大きな流れで説明すれば、社会認識を育てる場は、「である」と「ふかめる」、実践的な力を育てる場は「いかす」という学習過程を経て、「社会を見つめ、未来を問い続ける」子どもの育成をめざしていくものである。これら二つの場をバランスよく単元の中に組み入れていくことを大切にしていきたい。そうすることで、社会認識を通して公民的な資質の基礎を育てていくという社会科教育の不易の部分大切に授業づくりをしていくことができると考えている。

社会を見つめ、未来を問いつける子ども			
	社会認識を育てる場		実践的な力を育てる場
	知識		理解
学習過程	である	ふかめる	いかす
		<ul style="list-style-type: none"> ・社会的事象と子どもとの出会いの場 ・学習問題をつくる場 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習問題の解決に向け、調べたことから考え、表現する場
主に育てる力	問題発見力 (学習への関心・意欲・態度)		
	情報活用力 (観察・資料活用の技能)		
	思考力		
	判断力		
	表現力		

図1 研究主題に向けた社会科授業の構造図

以下、それぞれの学習過程において求められる力を説明していく。

① 「である」段階で求められる力

「である」とは、子どもが社会的事象と出会い、「どのように」、「なぜ」と問いを見付ける場である。この場では、社会で起こっている出来事を読み取るために、資料から必要な情報を読み取ったり、資料に表されている事柄の全体的な傾向をとらえたりすることができる資料活用の技能が求められる。例えば、ごみの収集量の変化を表した統計資料から、ごみが増え続けているという事実を読み取ることができる力である。

しかし、この場で主に育てる力として、問題発見力を位置付けている。問題発見力とは、社会的事象と出会った子どもたちが、事象に関心をもち、それを意欲的に調べようとする関心・意欲・態度に基づいて、問いを見付けることができる力である。例えば、家庭から収集所に出されたごみがなくなっている事象に出会った子どもたちが、「どのようにして、ごみがなくなったのだろうか？」という過程や構造を知るための問いを発見することができる力である。他にも、ごみの収集量が増え続けている事象に出会った子どもたちが、「なぜ、増え続けていたごみの収集量が減ってきているのだろうか？」と社会の背景が分かるための問い、「どうしたら、ごみの収集量を減らしていくことができるのだろうか？」と社会に参画するための問いなどを発見することができる力が挙げられる。このように、社会的事象に迫っていくために必

要な問題発見力は、「である」段階だけではなく、「ふかめる」や「いかす」のどの段階においても求められる力となる。

② 「ふかめる」段階で求められる力

「ふかめる」とは、一つは社会的事象に対して「どのように」、「どのような」と問い、事象の過程や特色・構造を表現する場である。もう一つは、社会的事象に対して「なぜ」、「どうして」と問い、目的と手段、条件と結果、原因と結果の関係を表現する場である。この場で求められる力は、必要な資料を収集する、複数の資料を関連付けて読み取る、複数の資料を収集したり選択したりする、資料を整理したり再構成したりするといった観察・資料活用の技能である。そしてこの技能を活用して調べたことから社会的事象の意味や関連性などについて「なぜ」と問うことに対して解決していくことができる思考力と考えたことを表出することができる表現力である。

③ 「いかす」段階で求められる力

「いかす」とは、「どうしたらよいか」、「どの解決策がより望ましいか」と問い、社会に内在する問題の解決のために合理的な手段・方法を判断する場である。この場で求められる力は、社会の問題に対してどうしたらよいか対策を考える思考力と、どの解決策が望ましいか価値を見極める判断力、そして、それらを表現していく力である。

また、この場はこれまで「広島社会科」が取り組んできた学習段階の「ふりかえる」も継承している。つまり、新たな問題と他の学習への発展の場、単元を貫く学習問題に対して、学習をふり返りながら総合的に判断していく場でもある。これらの場でも、既習内容を活かしてまとめたり新たな問題を見付けたりするため、思考力や判断力、表現力が求められる。

このように、社会的事象に「である」ための力、「ふかめる」ための力、「いかす」ための力、いわゆる「学ぶための力」を育てていき、子どもが事象に対してイメージしている主観的な見方・考え方をより整合性の高い客観的な見方・考え方へと高めていくこと、そして、その見方・考え方を他の事象にも活用しながら仮説的に事象を見つめていくことができる見方・考え方へと向上させ、「学んだ力」として定着させていく必要がある。

もう一つ、忘れてはならない力が、学習に対する関心・意欲に関わる力である。この子どものやる気に関わる学力は、社会科授業を成立させるための基底をなすものであり、「学ぼうとする力」として、それを育てていくことも大切にしていきたい。

また、社会科学習を通して、未来を問い続けることができる子どもたちには、社会の一員として自覚をもってよりよい社会を考えていこうとする「学び続ける力」としての関心・意欲・態度も育てていきたい。

その他に、「学んだ力」として、広島子どもたちには、「平和」・「環境」をキーワードとした社会認識を深めていきたい。社会科改訂の趣旨には、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うための具体例として、「持続可能な社会の実現をめざすなど」と記されている。我々も含め、これからの未来を担っていく子どもたちにも、持続可能な社会の構築をめざして、社会とかかわっていく力を身につけていくことは、

急務である。特に「平和」に関しては、広島は世界で最初の被爆地として、これまでも世界に平和を訴えてきている歴史的な土壌がある。持続可能な社会を構築していくために、「平和」や「環境」というキーワードは避けて通ることができない大切な学習内容である。

これらの広島だからこそ取り上げることに価値がある内容や国際的に求められている事柄を社会科に取り入れることで、持続可能な社会を構築していくための基礎を育てていくべきだと考えている。

以上のような社会科授業で大切にしていきたい力を研究主題と照らし合わせた場合、思考力、判断力、そして、それらの力を授業の場で表出させていくための表現力は、その中核をなすものであり、それを育てていくことに重点をおいた社会科教育を創造していく必要性を導き出すことができる。

社会科は、基礎的な知識や概念・技能を活用して、社会的事象に対する「どのように」、「なぜ」、「どうしたらよいか」などの問いを追究していく教科である。その問いに答えていくために中核となる力が、思考力であり、判断力であり、表現力ととらえている。

この三つの力を育てていくことで、社会のことが分かり、社会と自分との関わりに気付いた子どもたちは、社会的事象に関心をもち、それを意欲的に調べる学習意欲に留まらず、社会の一員として自覚をもって、よりよい社会を考えようとする関心・意欲・態度が形成されていくと考えている。

<引用・参考文献>

- 広島市小学校教育研究会社会科部会『社会科研究のてびき』，平成16年
- 文部科学省「新しい教育基本法について」，平成19年
- 文部科学省「教育三法の改正について」，平成19年
- 広島市小学校教育研究会社会科部会『広島の社会科 第39集』，平成22年
- 北俊夫著『新教育課程と社会科の授業構想』，明治図書，2008年
- 小原友行編著『「思考力・判断力・表現力」をつける社会科授業デザイン小学校編』，明治図書，2010年
- 岩田一彦著『社会科固有の授業理論30の提言』，明治図書，2009年
- 安野功著『授業実践ナビ社会』，文溪堂，2010年